

マルコによる福音書 14:43～52

「神のご計画は実現する」

2026年7月19日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

エルサレムでの一週間、結果的に最後の晩となろうというこの時、緊張の高まりと、そこでなお主イエスが弟子たちを愛される様子がかたられてきました。指導者たちは主イエスをなんとかだまして捕らえて、死刑に持ち込もうと計画しつつ、民衆を恐れてしばらく様子を見ています。その中、一人の女性が主イエスに高価な香油を注ぎかけました。これは一方では女性の主イエスに対する慈しみの心のあらわですけれど、一方主イエスはこれを埋葬の準備だとおっしゃいました。ユダは、主イエスを裏切って引き渡そうと祭司長たちのところへ話を持ちかけます。祭司長たちはそれを喜んで受け入れ、ユダはどうやって実行しようかと思案していました。

過越しの食事は、神のご計画どおりに行われましたが、その席で主イエスがおっしゃったのは、一緒に食事をしている弟子たちの中に裏切り者がいる、ということでした。弟子たちは、疑心暗鬼になり、また自分が裏切ってしまうのではないかと不安に陥りました。そして主イエスは、ご自分の死を覚え続けるようにと聖餐をお定めになりました。

食事の後、オリーブ山に祈りにいったとき、主イエスは弟子たちに、「あなたがたはつまずく。羊飼いであるわたしが打たれたら、羊であるあなたたちはちりぢりになるのだ」とこの先のことを預言なさいます。ペトロは、「皆がつまずいてもわたしはつまずきません」と勇ましく反論しますが、主イエスは「今夜、鶏が二度泣く前に、あなたは三度、私を知らないと言うだろう」とおっしゃいました。

ゲツセマネで主イエスは父なる神に祈られました。これから起こる苦難の出来事は父なる神の御心としてとうてい受け入れられるものではないと、この死の定めを杯をとりのけてください、と祈られたのです。けれどもその祈りは、「しかし、私の望みではなく、御心のままに」という言葉で終わりました。主イエスは御心のままに最後まで歩まれます。一方弟子たちは、祈らないで眠ってしまっていました。主イエスに従いきることはできない姿がすでにここに現れていたのです。

そして、ついにことが動き出します。緊張が破裂し、うらでひそかに動いていたこと、そんなことあるわけないと抵抗し受け入れなかったことがすべて動き出すのです。裏切りは実行され、主イエスは引き渡されるために捕らえられ、弟子たちは逃げてしまいます。救い主を目の前にした、人間のどうしようもない罪の姿が、このクライマックスに現れます。けれども、主イエスはここでおっしゃいます。「これは聖書の言葉が実現するためである」。ゲツセマネで祈られたように父なる神の御心が実現するのです。神はご自分のご計画のために、人の罪を消し去ったり、なかったことのように無視をなさったりはしませんでした。人間の罪の姿、すべてをご存知で、それを受け入れた上で、御心を実現なさったのです。御心のままに進まれる主イエスこそが神の御心の実現なのです。

一方、ここに登場する人間はすべて恐れにとらわれています。恐いのです。人間は恐くなった時に罪を犯すのでしょうか。

ユダは、接吻によってどれが主イエスカを知らせ、逮捕のきっかけとします。ユダは実際に主イエスを裏切っている間にも親しい関係を演出します。この接吻は、おざなりなものではなくて、特別に親しい人同士が特別な時にする、丁寧なものだったそうです。ユダはここでわざわざ「十二人の一人」と記されています。わざわざこう記されていること、主イエスと親しい接吻をしたことは、裏切りの卑怯さを際立たせ、歴史上ユダは大変嫌われてきました。けれども、ユダの裏切りの理由はこの福音書のどこにも記されていません。金銭でも、政治的な失望でも、特定の動機に還元されることなく、ただ「機会をうかがっていた」とあるだけです。この沈黙によって「ユダは自分とは違う、特別に悪い人間だ」と他人事として聞くことができなくなります。他の弟子たちは、この親しい接吻に自分たちの主イエスへの思いを重ねたかもしれません。もちろん、ユダは裏切り者です。弟子たちも、ユダが裏切ったことをここで確かに知りました。けれども、それでもなお、ユダの姿によって、自分たちは、接吻もなしに、主イエスを置いて、見捨てて逃げてしまった。このことを忘れられなくなったのではないのでしょうか。ユダは裏切り者であると同時に、自分たちの罪を映す鏡ともなりました。恐れにとらわれた時、人はそれぞれの仕方主イエスを見捨てる。ユダのような仕方ではなかったけれど、弟子たちは自分たちも裏切りものであることをすぐ後に知ることになります。そして、これはこの場面に立ち会うすべての人間の姿でもあるのです。主イエスご自身は、裏切りとしていながら、このユダの接吻をお受けになりました。ただ御心の成就のために必要だからというだけでなく、ここでもユダを愛しておられたに違いないと思います。最後までユダを愛することも御心だったと、わたしは思います。

主イエスを逮捕しに来た人たちも、またこの人たちを送った祭司長、律法学者、長老たち指導者も恐れていました。怖かった。怖かったから、夜の闇に紛れて、こそこそ捕まえに来たのです。怖かったから、たくさん人間と武器を集めたのです。もし怖くなかったら、武器を持つ必要なんかないでしょう。いったい彼らは何をそんなに怖がったのでしょうか。第14章の最初に、こう書いてあります。

「さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、どのようにイエスをだまして捕らえ、殺そうかと謀っていた。彼らは、『祭りの間はやめておこう。民衆が騒ぎ出すといけない』と話していた。」

彼らは、民衆を恐れたのです。人の目を恐れたのです。もともと、なぜ彼らが主イエスの死を願ったかという、たんなるねたみであって、民衆の人気と尊敬が、自分たちではなく、主イエスの方に向けられるようになったからです。妬みという感情は、他人から見れば非常にくだらなく見えますが、本人からしたら、大問題。なんとか相手を失脚させたい。そしてそれが結局は殺そうという思いにまで高まってしまうものなのです。主イエスは人間のこのような恐れ、弱さを御存じでした。48節以下でこう言われました。「まるで

強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。私は毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたがたは私を捕らえなかった」。毎日神殿と一緒にいたときに、「ちょっと来い」と言えば済んだ話だ、と。なぜ夜の闇に隠れるのか。なぜ群れをなして、剣まで持ってきたのか。その前にすでに「そばに立っていた者の一人が、剣を抜いて大祭司の僕に打ちかかり、片方の耳を切り落とし」たのですが、これこそ、その人怖かったからとっさにやってしまったことに違いありません。

このような人間の姿は、実は私たちにもよくわかるのではないのでしょうか。いちばん弱くて、怖がりな人間ほど、意味もなく他人を怖がらせようとするものです。ちょっと自分を批判されたりすると、ひどく感情的に攻撃的になる人がいます。そういう人を客観的に見ると、「弱い人なんだな」、「弱い犬ほどよく吠えると言うもんな」、「きっと上の人間には歯向かえないんだろうな」とちょっとかわいそうに思ったりするのですが、実は自分自身もそういうところから決して自由ではないのです。自分がそういう立場に置かれたら、果たして毅然とした恥ずかしくない態度でいられるだろうか。人間の弱さが顕になされたのがこの逮捕の場面なのです。

このことに対する主イエスの言葉は大変勇ましいものに聞こえます。実際、この主イエスの毅然としたお姿、相手の卑怯さをあらわにする勇敢なお姿は、実際に自分ができるかどうかは別として、迫害を受ける信仰者の模範といえるでしょう。「こちらには何の非もない。あなたたちは何を恐れているのか」と。けれども、この逮捕の出来事を神の御心の成就だと宣言なさる主イエスは、単に勇敢な人を超えた、救い主としてご自身をお示しになりました。「昼間にきても、夜来ても、わたしは捕らえられ引き渡される。そのことをあまんじて受けよう。これが神の御心なのだから」。

本日の箇所でもとても重要な、そして印象的に並べられた言葉です。『「これは聖書の言葉が実現するためである。』」「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」。救い主である神の御子イエス・キリストは、どこまで御心を受け入れ、すべてをお委ねして歩いていかれます。それは、一度は受け入れがたいとお感じになったことでした。けれども祈りにおいて、自分の望みではなく父の御心になるようにとの祈りにこそ主イエスの歩む道がありました。弟子たちは、主イエスが先におっしゃったとおり、逃げてしまいました。弟子たちは散らされてしまいました。このことを「教会はここで一度死んだ」と言った説教者がいました。29 節では「たとえ、皆がつまずいても、私はつまずきません」と言ったり、「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と豪語したりした弟子たちですが、そのような教会は、一度死ななければならなりません。羊飼いを失った羊は散らされるだけでなく、生きていくことができないのです。「わたしはできます。やれます。」、「もう一人で大丈夫です。世話にはなりません」などという教会は生きることができるわけがありません。

教会は決してわたしたちの力で存在しているわけではありません。「これは聖書の言葉が実現するためである」と主イエスはおっしゃいました。この時の逮捕のできごとだけのことはではなくて、教会が死ぬのも、生きるのも、すべては神の御心の成就なのです。わた

したちが教会を造りたいと思って造り、教会をやりたいからやっているわけではないのです。そうであれば、わたしたち一人ひとりが今ここに生かされて、教会をかたちづくっているのも、なんらかのつながりで一緒に礼拝しているのも神の御心なのだと信じることができます。

ここで最後に不思議な話が残されています。浴衣のように一枚だけ布をまとして主イエスについてきていた若者がいたのだけれど、自分もつかまりそうになったので、素っ裸で逃げてしまった、というのです。どう理解していいかわからない記事で、さまざまな説が飛び交います。わざと読者を困惑させるために書いた、という人まで現れる始末です。けれども、これもあくまでも一つの説にしか過ぎませんが、これもまた恐れによって逃げてしまう人間の姿なのではないでしょうか。ユダのようにはっきりと裏切るでもなく、弟子のように一生懸命従ってきたにもかかわらず、結局はにげてしまったというのでもない、ただ、突然のことでパニックになって逃げてしまった。このみっともないといってもいい姿もまた、主イエスを見捨てた一つの姿であり、わたしたちの姿でもあらうと思います。

「弟子たちは皆、主イエスを見捨てて逃げてしまった」。「裸で逃げてしまった」このような弟子の失敗、不信仰の記事、このあとまだあるのですが、を読むたびに、よく教会はこのような12弟子の失態ともいってよいような罪の姿を書き記し、それを語り継いできたものだ、と思わされます。普通は記録にはこういうことはなまなましく残さないものです。わたしたちの教会の何十年記念誌にはこういうことは載せません。もちろん全体として、歩みの中で罪を犯した、ということは正直に書くかもしれませんが。名前を出して、あるいはこのグループが、こんな罪を犯した、主イエスを見捨てた、などとはとても書けないし、書くべきではないでしょう。けれども福音書に記される弟子が見捨てた姿は、2,000年のあいだ一度も「これは体面が悪い、12弟子の権威が傷つく」といって削除するなどということは起こらなかったのです。けれどもすべては主イエスのこの言葉「これは聖書の言葉が実現するためである」というこの言葉にかかっています。このような弟子の姿もまた神の御心として起こり、聖書に記されてかたりつがれました。福音書に記されているのだから、神の御心の成就として記されているのだから、これらの弟子の話もまた「福音」、「喜びの知らせ」だと言った説教者がいました。そのとおりだと思います。弟子たちの失態、みっともない話、罪の姿も、けれども、そこに神の御心が行われる、主イエスの救いが起こる。自分たちが困難と罪と恥を頑張って乗り越えるのではなく、このようなわたしたちのために主イエスは命をかけてくださり、救ってくださり、命を与えてくださったのです。

なお、恐れゆえに罪を犯してしまうわたしたちです。主の前から逃げてしまうわたしたちです。けれども、この罪を拭い、罪を覆ってくださる主イエスがおられることをわたしたちは知っています。実は、これこそが恐るべきことです。復活の命によってよみがえらされた教会、それはまさにここにある藤沢北教会のことです。こうして小さい群れですけど、主イエスに生かされて歩みを続けている。これこそが恐るべきことです。自分の

身を案じる恐れではありません。神の御業のいかに大きいことであるかへの恐れです。この恐れがあるからこそ、主イエスを見上げ、従い、ともにいてくださることを信じる歩みを続けることができるのです。